

TRAIL RUN

トレイルランニングをこよなく愛する人たちに贈るディープな情報

150回

MARCH

文/吉本亮

トレイル通信

特別企画② トレイルレース今昔物語

2005年

初の海外遠征、マレーシアの キナバル山国際クライバトン

筆者が過去に出場したレースを、不定期に紹介していきます。当初、ホノルルマラソンに参加予定で10万円の費用を用意していたのが諸事情で頓挫。代わりに見つけたのが、5日間で9万9000円、富士山より高所を上り下りする、このマレーシアの大会。初の海外遠征でした。

準備から出国まで

その年は初めて富士登山競走を完走できた年なので、練習も富士登山競走と同様に、近場の坂道を上り下りして本番へ向かいました。しかし、いつもとは勝手が違うのが食の事情です。筆者はパクチーやナンプラーなど、アジアらしいクセのあるものが苦手。とはいえ、エネルギー切れで走れなくなると大変なので、対策として、炭水化物系の食料を日本から持参。レース当日までの5〜6食分を、サトウの切り餅と粒あんの缶詰でしのごく作戦で、もちろん現地でも熱湯が使えるとは限らないので、海外対応の小型湯沸かしポットも用意しました。

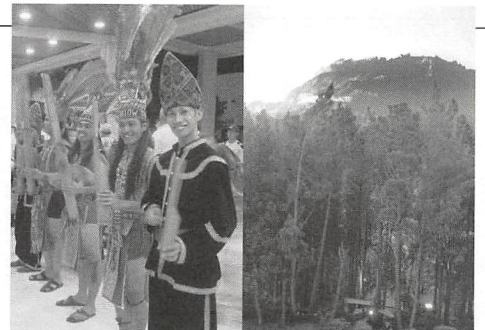
成田空港に到着すると、ツアー一行は8人。富士登山競走の上位も招待されるために、鍋木毅さんと坂根充紀栄さんも参加。他はこんなレアな大会を好む、筆者に似た感じの人が数人いました。

民族衣装でお出迎え

コタキナバルはカリマンタン島北部にあるサバ州の州都です。入国審査が終わって到着ロビーに出ると、民族衣装を着た人たちが踊りながら出迎えてくれました。後援がマレーシア政府観光局とサバ州観光局で、現地のプロモーションを兼ねたレースになっていました。

初日は5つ星ホテル。ガラス張りのバスルーム付きの部屋に、男2人で宿泊。イスラム教国らしく天井にはメッカの方向が示されていたり、トイレに紙がない代わりに水を噴射するホースがあったりと、衝撃を受けました。しかし、懸念していた料理は5つ星ホテルだけあって、普通のレストランもあり一安心。

翌日は、まず市内の巨大な寺院や市場を見て回りました。魚市場



(右) 麓のホテルから見たキナバル山。(左) 空港で出迎えてくれた民族衣装の人たち

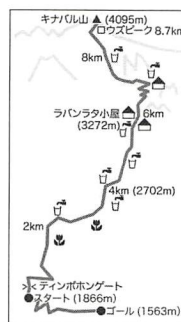
には大量のナマコが干してあり、そこにドリアンのおいが拍車をかけて、エキゾチック感を加速させます。なおに耐え切れず、1人で町に向いて金物屋をのぞいていると、筆者がコレクションしている看板を発見。「正在維修(修理中)」と書いてある看板をお土産に購入しました。

その後、バスで会場へ向かいましたが、勾配がきつくて何度も止まりそうになります。白煙を上げて止まっている車も、何台か見かけたほどでした。受付で書類やゼッケンを受け取り、隣にあった売店を見て回ると、サソリの標本が売ってあったり、日本未発売のマングリン味のパワージェルを見つけたりしてテンションがアップします。

その夜は、大会本部もあるベルカサホテルに到着。バスタブにお湯を張るとなぜか黄色かったりしましたが、平和に眠ることができ

【クライバトンの歴史】

レスキューの速さを競う大会として1987年にスタート。山頂往復のコースだったが、環境保護の名目から2013年は山頂なしの長いコースに。14年は山頂コース復活、15年は地震でキャンセル。16年に復活したものの、17年に30回大会で終了している。最速タイムはキリアン・ジョルネの2時間11分。



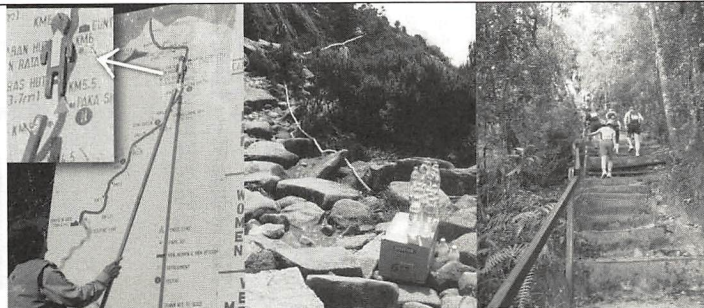
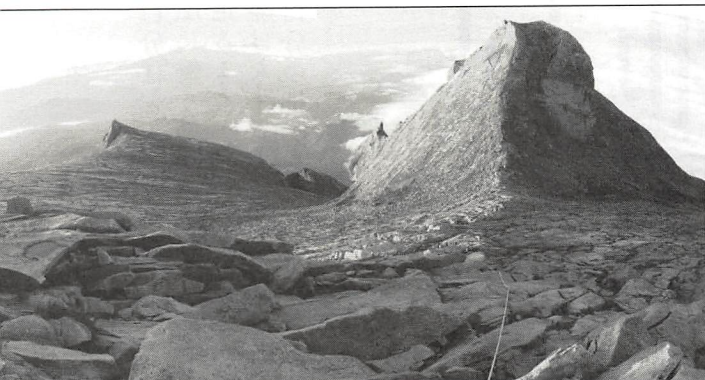
ました。

ペットボトルはご自由に

初日は、女子と40歳以上の部が開催。民族衣装の人たちが鐘をたたくなかをくぐってスタート。まずは標高4095mのキナバル山頂を目指します(地図参照)。エイドは水だけで、ただペットボトルが箱ごと置いてあったり、転がしてあったり、多くは無人。ゴミ箱がなく、参加者は皆近くにパンパン捨てていますが、掃除をする人は多いようなので、問題なさそうです。

熱帯雨林らしい湿った場所を抜け、6km地点辺りにラバンラタ小屋が出現。ここから先は森林限界を越えるために岩盤地帯で、強い風が吹き抜けていきます。

山頂まで一枚岩で、表面はザラザラした花崗岩のために、ぬれて



(右から)スタートしてすぐはきつい階段が多い。/勝手にペットボトルを取っていきける無人エイド。/トップランナーの場所を刻一刻と伝える掲示板は、竿で人形を動かしている



いてもグリップは良し。手首ぐらいの太さのロープが張ってあり、つかめませんが、これは、いわばコース案内。上りで目安として使うことはあれども、下りは走りやすいところを選ぶために、あまり関係がありません。空気が薄くなつて歩きだし、トップの選手とすれ違うようになると、山頂のロウズピックは目の前です。

雲海にダイブする感覚！

山の名前を刻んだ板にタッチし、下りを開始。幅100m以上ある岩盤の先に見えるのは、雲海、そして数千メートル下の町並み。雲にダイブする感覚で駆け下りるのは、このレースだけでしか味わえないクライマックスです。

ラバンラタ小屋からは再び路面が湿り、滑りやすくなります。岩を下る途中にハシゴもありますが、ソールがぬれているために足を踏み外しそう。実際に下ってる最中に石の上で滑り、軽いケガをしました。

ティンポホンゲートを過ぎると舗装路になり、スタート地点も通り過ぎて、さらに下っていきます。民族楽器の鐘の音が大きくなって

(上から)ガレ場もある。/同山の名所ドンキーイヤーは、この後2015年の地震で折れてしまった。/ず〜っと同じ斜度で岩盤の上りが続く

きたら、もうすぐフィニッシュ。ゴールテープを切ると、すぐに完走メダルを首にかけてもらえました。実はこのレース、どこで折り返しても、ゴールすれば完走メダルをもらえるため、本当の完走者は3割程度なのに、メダルを受け取る人の割合は9割近いとのこと。転ぶ選手が多いため、フィニッシュ隣の救護室で筆者も含めて、たくさんの方が治療中でした。

賞金は大盤振る舞い

翌日はオープン部の部なので、応援がてら森のなかを散策。日本にない植物がたくさん自生しており、ウツボカズラをよく見かけました。世界最大の花・ラフレシアもこの辺りに育ちますが、簡単にはお目にかかれませぬ。

そうこうするうちにトップの選手が帰還。日本人では、転んで傷だらけの鍋木さんが一番下りてきました。この大会は賞金レースで、1位の50万円を筆頭に賞金総額は約400万円。300人が参加料4000円を払っても、それ以上が賞金に消えるという大盤振る舞いでした。

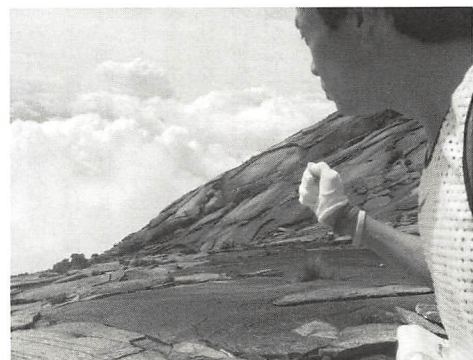
閉会式後、その日のうちに空港

吉本 亮 よしもと・まこと

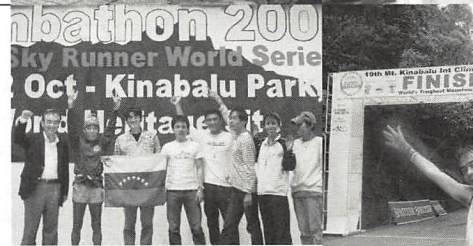
2002年に富士登山競走に出るも8合目前で失格。同年の初マラソンは福知山で4時間。12月は屋外忘年会。一晩中焚き火を囲んでいたで、ウエアからシュラフまで、まるっとスモークされました。

へ。午前0時半に現地を出発し、日本時間の7時に成田到着と、あつという間の帰国でした。

レース内容的にも、他にはない魅力があり、私は翌年と2009年も参加。またヴィアフエラータという山遊びにも挑戦しました。これは、本来なら登山者がピンを打ち込みながら進む壁面に、あらかじめワイヤが張られたコースを使うもの。一般人でもたどれる安全性がありながらも、ここは世界最高所のヴィアフエラータとなっています。



(右)2009年は大型ザックを背負って無事に山頂を折り返せました。(左)ヴィアフエラータはワイヤ設置済み。カラビナを引っかけていくだけで進むことができる



(上)下りは雲海に向かってダイブする感覚で走る。(下左)左から3人目が鍋木さん、右から2人目が坂根さん、3人目が筆者。(下右)転んだけれど無事に初ゴール